

今月は、“おーちゃん”こと、葵が絵本のご紹介をさせていただきます。

つい先日、私の母からの勧めで知った絵本が『葉っぱのフレディーいのちの旅ー』でした。初版は1998年と、私が5歳のときの絵本で、中をみるとイメージする「絵本」とはちょっと違い、どちらかという文字が多い絵本かつ自然の写真が掲載された絵本になっています。



あらすじは、**大きな木の太い枝に生まれた、葉っぱのフレディのおはなし**です。春に生まれたフレディは、数えきれないほどの葉っぱにとりまかれています。はじめは、葉っぱはどれも自分と同じ形をしていると思っていましたが、やがてひとつとして同じ葉っぱはないことに気がつきます。

フレディは親友で物知りのダニエルから、いろいろなことを教わります。自分達が木の葉っぱだということ、めぐりめぐる季節のこと…。フレディは夏の間、気持ちよく楽しく過ごしました。遅くまで遊んだり、人間のために涼しい木陰をつくってあげたり。秋が来ると、緑色の葉っぱたちは一気に紅葉しました。みなそれぞれ違う色に色づいていきます。そして冬。とうとう葉っぱが死ぬときがきます。死ぬとはどういうことなのか…。ダニエルはフレディに、いのちについて説きます。「いつかは死ぬさ。でも”いのち”は永遠に生きているのだよ。」フレディは自分が生きてきた意味について考えます。「ねえダニエル。ぼくは生まれてきてよかったのだろうか。」そして最後の葉っぱとなったフレディは、地面に降り、ねむりにつきます。

この絵本は、アメリカの著名な哲学者 レオ・バスカーリア博士が書いた生涯でただ一冊の絵本だそうです。彼は、教員として、学習障害の子どもたちを担当したり、教育学の博士号を取得後、大学で教鞭を採っていたとのこと。後、教え子の自殺という事件に遭遇し、それ以来いのちの教育や、人を愛することや自分を愛することを教え、「愛の博士」と呼ばれていたようです。

あらすじだけを読んだり、一回さっと読んだだけだと、「なんだ～葉っぱの話か～」と終わってしまいそうですが、物語の主人公「フレディ」を自分に置き換えると、「自分は何のために産まれてきたのか」「わたしたちはどこからきて、どこへ行くのだろうか」「生きるということはどういうことなのだろうか」「死とはなんだろう」と、絵本の冒頭に掲載されている編集者のことは同様の根本的な問いが浮かんでくることでしょう。

私も、コロナ禍になり、以前ほど自由に行動できない日々が続く中で、「自分」や「時間」を見つめなおす…「何をしようかな」と考える時間が多くなりました。いつ終わるのかもわからないコロナ時代をどのように生きようか、どのように楽しもうか、「先が見えないもの」の見知らぬ恐怖は人々の心に不安として押し寄せてきます。しかし、フレディの親友「ダニエル」が言います。「まだ経験したことがないことは 怖いと思うのだ。でも考えてごらん。世界は変化しつづけているんだ。変化しないものは、ひとつもないんだよ。春が来て夏になり秋になる。葉っぱは緑から紅葉して散る。変化するってしぜんなことなんだ。きみは春が夏になるとき かわかったかい？ 緑から紅葉するとき かわくなかったろう？ 僕たちも変化しつづけているんだ。死ぬというも、変わる事の一つなのだよ。」と。ただ世界は巡り巡っているだけ。いのちのバトンもそうやって繋がっていくのだと思います。コロナ禍で不安な日々が続きますが、きっと乗り越えられるものと信じて前を向いていきましょう。

この絵本は、未来は明るいと信じられる一冊ではないかと思えます。ぜひ、一度読んでみてくださいね♪

2月生まれ、お誕生日おめでとう！